

第38回理事会開催

1984(昭和59)年度の事業報告・決算の承認など

去る6月10日、東京にて第38回の理事会が開催された。まず昨年度の事業報告書と収支計算書等に基づいて一年間の事業内容が報告され、審議の結果、原案どおり承認された。今回の決算により、財団の基金(基本財産と運用財産を含む)は113億5千万円となった。

この他、フォーラム助成対象の決定、成果発表助成の報告と決定、第4回研究コンクールの選考委員の選任が行われた。また、研究助成の応募状況についても報告がなされた。

引続いて第10回評議員会を開催

理事会に続いて第10回の評議員会がもたれた。評議員会では昨年度の事業内容についての報告とともに、本年度の事業計画についても説明が行われ、意見交換が行われた。また、タイにおける国際助成活動の姿を記録したビデオ・フィルム「明日へ——固有文化からの出発——」によって、現地サイドの目によって見たこれまでの活動内容が紹介された。

研究助成に700件を越える応募

研究助成の一般公募は本年4月より開始していたが、この程、応募を締切った。応募状況と本年度助成予定は下表のとうりである。第I種(個人奨励研究)は約10倍、第II種(予備研究)は約15倍、第III種(総合研究)は2.3倍、特定課題は4.6倍の倍率となっている。7月から9月にかけて選考が行われ、10月初めに助成対象を決定の予定である。

1985年度研究助成 申請実績と助成予定

		第I種 (個人奨励研究)	第II種 (予備的研究)	第III種 (総合研究)	I, II, III種 小計	特定課題	合計
申請件数	申請実績	258	374	34	666	46	712
	助成予定	25	25	15	65	10	75
申請金額 (万円)	申請実績	4億 4,244	11億 606	3億 770	18億 5,620	8,943	19億 4,563
	助成予定	4,000	6,000	1億	2億	2,000	2億 2,000

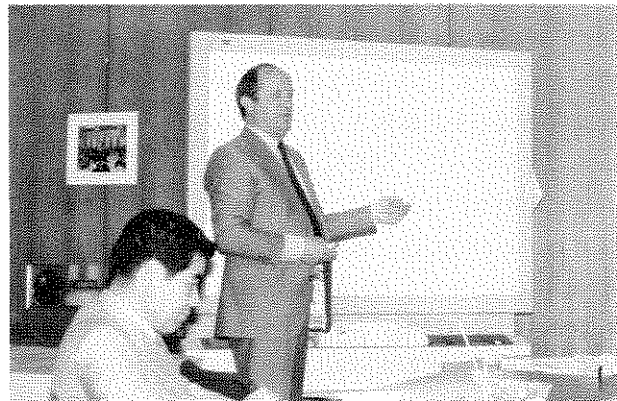
目次

- ◆余白を埋めて…………… 2
- ◆身近な環境—研究の現場から…………… 3
- ◆追跡調査20年…………… 4
- ◆「海洋環境工学」の出版に至るまで…………… 5
- ◆ヴェトナムの東南アジア研究…………… 6
- ◆新刊紹介・他…………… 7
- ◆最近の報告書から…………… 8

イギリスのチャリティー制度について解説

——CAFのM. プロフィ氏を囲んで——

去る5月2日午後、イギリスのチャリティズ・エイド・ファウンデーション(CAF)の専務理事であるマイケル・プロフィ氏が財団事務局を訪問された。この機会にイギリスのチャリティー制度についてうかがい、同時に日本の主だった財団についてもご紹介できればと思い、いくつかの助成財団の関係者に集まっていたが、セミナーをもった。3時間あまりの懇談で多くのことを学ぶことができたが、外国の制度や実態を正しく理解することの非常に難しいことも痛感された。下の写真は当日の様子を示したものである。





余白を埋めて

トヨタ財団事務局長 山口日出夫

I 近年の財団活動の特徴のひとつに国際化があげられよう。ここ数年の間に設立された財団には“国際”を冠する財団が多い。わが国の国際社会における地位、或いは国際交流が重視されていることからすれば当然であろう。しかし、だからといって、財団を巡る環境が国際化時代にふさわしいかという未だしの感がする。たとえば、公益法人等の基金の金融収益への課税の動きである。国際的にはたいへん立遅れている財団活動にたいする施策としては到底黙過し得ない。

先般、国際的な農業研究を支援するグループの方が当財団を来訪された。食料難に喘ぐ発展途上国の農業を支援する活動をしておられるこのグループは、既に国からは相当の援助を得ているが、ぜひ民間からの支援がほしいということであった。国からの援助だけではいろいろな制約もあつて思うにまかせないという面もあるが、国ばかりでなく民間レベルでも参画してほしいということであった。早くからアメリカでは、ロックフェラー財団も、ケロッグ財団も、フォード財団も力をかけて下さっているのだから、経済大国日本の民間財団も援助してくれたらということである。金額の多寡ではない、精神的なバックアップや多くの人々のかかわり合いが必要ということである。日本には農業研究を支援する財団もすくなく、期待には応えられそうもなく残念なことであったが、それ以上にこのような大切な問題は、国だけでなく民間の善意の手が多数さしのべられることが期待されていることを知った。国際的な感覚からすれば国も民間もあげての努力がなされなければならないということなのである。わが国では、財団の免税論議の際、国や地方公共団体の肩代りをして公益活動をおこなうのだから免税して助成するのだといういい方がされる。財団側からすると肩代りだけでなく、もっと幅広く積極的な社会への貢献を考えているわけであるがよくわかって貰えない。更にいえば、社会全体がこのような民間活動に意義を見出すことがこれからの時代には必要だと思うがそうならない。そうなれば課税強化論などはあり得ないと思うが、日本の社会にはまだまだ大切なことが欠落しているのではなかろうか。

II 財団活動がもう少し理解されたらという想いはいつもつきまとうものであるが、それは洋の東西を問わないことらしい。昨年秋、当財団の設立10周年にあたり来日した「The Big Foundations」（邦訳「アメリカの大型財団」）の著者ワールデマー・A・ニールセン氏は、パーティーの席上「財団というのは非常に奇妙な、そして大変不条理な存在であり、政党のように党员とか、選挙区のようなものがあるのでもない。それから企業のように顧客のある組織でもない。そしてほとんどの人間は一生懸命お金を作ろうと一生を費すが、財団というのは一生懸命そのお金を使おうと必死になる大変不思議な組織で…」と諧謔まじりに話されていた。財団が分りにくい存在であることは確からしい。

外部の人からよくいわれることは、東南アジアに助成をするのはトヨタ自動車車が車を輸出しているからですか、ということである。出捐企業の経営戦略と財団の活動とは関係があるのでは、ということである。この間、東アジアからお客様にも同じことをいわれた。多くの人は企業財団をみて企業の営利活動と関係のある活動をしていると思っている。ところが実際は違うわけであるからニールセン氏流に言えば「不思議な組織」ということになってしまうのかも知れない。

財団はいろいろ立派なことをいうが、それは建前であつて本音はちがうのではないかと世間一般は見ているのであろうか。財団の内部にいるものとしては、それこそ建前どおり公益性を重んじ、不特定多数の利益のために最大限の努力を払っているのに少しも分ってもらえないということになってしまう。

財団活動を説明する場合、その辺の事情を十分に認識したうえでないと誤解を生じる。つまり財団の内と外とにある乖離をよくよく認識することが大切である。財団側は自分達のこととはよく理解されてないし、また理解されにくい存在であることの自覚が必要なのではないか。

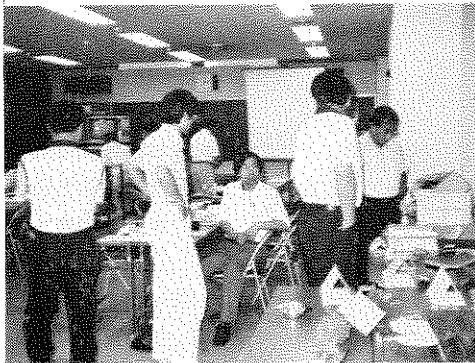
それでは、これに対して打つ術はということになるが、結局は奇を衒うことなく功をせせらず地道に実績を積重ね事実を以て語るより致し方ないのではないか。いま検討がすすめられている助成財団資料センターも有力な理解活動の手段となり得るであろう。とにかくすこしずつでもわが国社会にある余白を埋め、国際的に通用するよりよい社会づくりに貢献したいものである。



都市鳥研究会は、ツバメやカラスやムクドリなど、都市で人間と共存している鳥について、皇居周辺を中心に、その実態を調査しています。

6月22日(土)のインタビューには川添登先生と柴田敏隆先生(前委員)においでいただき、神田のガレージの中のツバメの巣や、銀座の街路樹の上のカラスの巣など、チームの方々のご案内でフィールドを見学してまわりました。写真は、お堀でかの有名なカルガモ一家をのぞき込んでいるところ。まさに都市鳥と人間のつながりを示すひとこまでです。

愛知の産業遺跡・遺物調査保存会には、島津康男先生が6月30日(日)にインタビューに行かれました。高校の先生方を中心に愛知県下の主要な産業遺物を精力的に調査しているチームです。この日は定例の研究会で、ガラ紡織機と、窯業のダルマ窯についてのこれまでの調査報告などがありました。写真は休憩時間ですが、机の上に展示してあるのは



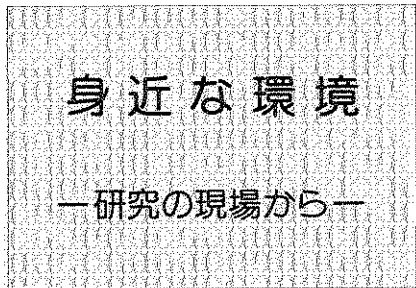
ダルマ窯で焼かれる瓦の現物の見本です。他にガラ紡の機械の部品も展示してありました。

“身近な環境をみつめよう”と題する研究コンクールは、現在第3回目が進行中。

昨年11月以来、全国の10カ所で、研究奨励賞を受賞したチームがそれぞれ2年にわたる本研究を実施しています。この6月から8月にかけては、各チームの進捗状況を見せていただくため、選考委員の先生方に分担して研究現場に足を運んでいただき、インタビューを行っています。今回はその中から4つについてご紹介します。

活動は主に休日に

このコンクールは、生活者の視点から



自分たちの身近な環境をとらえなおしてみようという趣旨ですから、各チームともそのメンバーはいわゆる専門の研究者だけでなく、様々な職業の人たちが主体となります。従って、まとまった調査や

研究会はどうしても休日を使って行われることが多く、結構大変なようです。しかし、どのチームも楽しみながら研究にとり組んでいる様子です。

10月からは第4回目の公募を

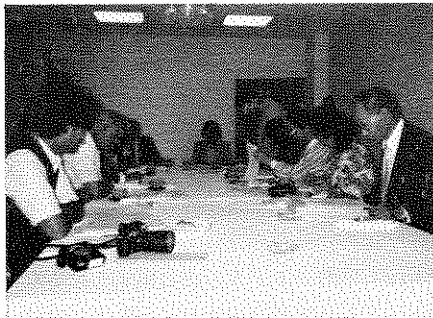
本年10月15日からは、新たに第4回コンクールの公募を開始します。財団では全国でより多くの方々がこのコンクールに参加して下さることを期待しています。応募要項は10月初旬にでき上りますが、それ以前でも、このコンクールについて詳しくお知りになりたい場合は、財団までご連絡下さい。(担当：久須美)

東京の日野市周辺では、**やほ耕作団**が、地主から農地を借りて、都市住民による自営農業の可能性について実践的研究を行っています。



6月23日(日)には、小原秀雄先生と木原啓吉先生が現地インタビューに行かれました。写真は、ちょうど田植を終わったばかりの自前のたんぼの前で説明を聞いているところ。機械植えないので、一見乱雑ですが、一日すれば苗もシャンとして水田らしくなるのだそうです。別の畑では野菜や綿なども作っています。収穫した綿からはふとんも数枚作れたそうです。

南部の味と暮らしの環境を考える会は、風土に合った、安く安全でしかもうまい食べものの探求を通じて、食生活・食文化をみなおそうと活動しています。地元で採れる山の幸や海の幸などの素材を生かし、伝統的調理法を踏まえて新しい調理法も工夫し、それらを南部料理暦としてまとめているところです。今後この料理暦を保育園や老人ホームなどで実践し、評価しようとしています。写真は原ひろ子先生にも参加いただいた研究会の様子ですが、このチームの特徴はなによりメンバーの職業の多彩さでしょう。





追跡調査20年

下北半島出身者の職業的社会化過程

岩手大学人文科学部助教授 細江達郎

●同級会を訪ねる

この一月、浅草は浅草寺の境内を抜けてほどなくの食堂の2階で、青森県下北郡Y村Y中学校昭和39年3月卒業生の関東在住者の同級会が開かれた。卒業生82名のうち男女十数名が出席した。中学卒業以来20年、30才代半ばの年齢相応の人生の刻みと落ち着きをそれぞれの挙措の中に顕わしていた。幹事のひとりから連絡を受けていた私は招かざる客として、少し遅れて、宴たけなわのころそれに加わった。参会者の中には私がこの二三年のうち何度か会ったことのあるO君もいた。もっともこの会場である食堂は、彼が中卒後、集団就職で上京し、最初に就職したが、先輩との折合い悪く半年でやめたところでもある。彼はその後何回かの転職の後、現在では大手靴屋の横浜のある店の店長となっている。私にとって名前はもちろん知っているが、初対面の参加者も多い。このような機会は調査の趣旨を理解してもらうとともに、それぞれの「空白の」生活史を聞き出す絶好の機会である。

このY中学校の同級会がこういったかたちで開かれるようになったのは昨年からのようである。これには年齢相応の時宜にもよるが、研究助成によって再開された私共の追跡調査により作成された住所録も貢献している。また集まりを始めようとした幹事の何人かは3年前の暑い

夏、私共の面接調査に協力し、さらに上野の西郷さんの前に集まって中卒以来の再会を喜びあった人たちである。

●20年を隔てて

昭和38年東北地方の各地の中学三年を対象とした「青年期の社会化過程の社会心理学的研究」はその後様々な形で継続されていたが、特に九学会連合下北総合調査の一環として行われた青森県下北郡・むつ市の4市町村10中学校の約900名は「職業的社会化過程」の課題で追跡的に調査が継続されてきた。当時学生であった私は東北大学の安倍淳吉先生（現国際商科大学教授）や九学会の関係で加わっていた島田一男先生（現聖心女子大学教授）などの諸先生・諸先輩の下北の宿での深更に及ぶ議論を感動してながめていた。もちろんその後20年以上もこの調査に関わるなどとは思ってもみなかったことである。その後この調査は多くの関係者によって引き継がれてきた。今や私は、当時の私と同じ若い学生達を相手に調査の宿で体験的調査方法論を弁ずることとなる。

つまり、私共の課題「職業的社会化過程」は対象者のそれであるとともにまさに研究者側の社会化の過程でもあったのである。これはもちろん戯画的な意味ではない。社会科学のほとんどの所産は研究者と対象者との相互関係にもとづき産み出される。しかし、一般に「結果」は研究過程と切りはなされ、それ自身が独立していることで客観性を保ちうるものと考えられている。現実には対象や課題が研究者のライフ・スペースの中での位置により大きく影響を受けていることは多くの研究者が実感していることであろう。ただ旅行だけが楽しみであった頃、いっばしの研究者づらをして生意気に学会発表をした頃、それぞれの時にこの調査課題と対象者は私に別な様相を示した。これはまた対象者側にあっても同様である。雇主に連れられて都内に滞在して

いる私共のところへきた中卒間もない頃、訪ねていった私共をめいわくそうにほとんど話してくれなかった20才頃、私共の遠方よりの来訪を奥さんともども歓待してくれた時、その対応差の中に職業的社会的の実態が如実に顕われているのである。

●さらに続く道程

財団の助成により今回刊行した報告書では面接等によって得られた「結果」を調査者の調査過程の中にそのまま置いてみるという手法をとってみた。（実情は結果の整理と統合ができないのでケースレポートとフィールドノートをそのまま刊行したというところではあるが）ご批判を請うものである。

社会化の過程は単に適応の過程ではなく、このように互いに環境となり、対象となりあう過程である。30才代半ばの対象者はまさに組み込まれ適応していく側ではなく、今や自らの子供の社会化の対象として、エージェントとしての役割を最も果たすべき時期に到達している。それは地域社会の変化の担い手として、職業社会の中核部を占める者としての成人の役割である。やがて人はその役割から老人期へと移行することになる。職業のもつ意味は結局このように life-span 全体の中に位置づけて確認せざるを得ない。

本追跡調査は今後も何らかの形で継続されていくだろうが、それはまた研究者側にも新たな対応を要求してくるようになる。

今年1月浅草での同級会。左端筆者





○プロローグ

昭和60年6月13日、東京大学出版会の会議室で、ささやかな出版記念会が開かれた。これは「海岸環境工学—海岸過程の理論・観測・予測方法」という600頁に及ぶ図書の出版を祝い、かつこれに何らかの形で関わった方々の労をねぎらうために催されたものであり、トヨタ財団や日本生命財団のスタッフの方々も参加いただいた。以下には、この本の出版とトヨタ財団の係わりについて、その経緯を述べる。

○共同研究の端緒

わが国の海岸線延長はほぼ3,400km、国土面積ではわが国の25倍にも達するアメリカ合衆国の海岸線に匹敵すると言われている。しかし、その国土の約70%は山地であり、従って海岸に沿った低平地は人口が密集し、そこで産業、経済の諸活動が営まれている。このような環境下にあるわが国では、古くから海岸域への働きかけが活発であったのは周知の通りである。

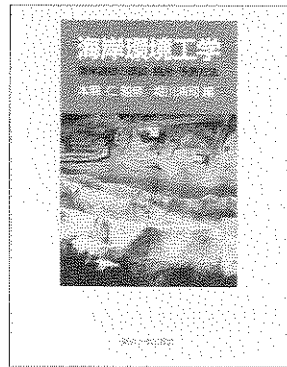
昭和30年代の後半、高度経済成長の政策に則り、海岸域で大規模な工事が次々と行われるようになった。当初は、構造物の建設そのものに関心が寄せられていたが、やがてその周辺の海岸環境、とくに海岸地形の変化に及ぼす影響が社会的な関心を呼ぶようになった。そこで、工事申請に対して行政当局は、周辺の海岸に及ぼす影響の予測と、それに対する具体的な対応策を求めようになった。一方で、海岸工学の専門家は長年にわたって漂砂（海浜での土砂移動）について研究を行ってきた。しかし、現象が余りにも複雑なために、その当時大きな障壁にぶつかっていた。

昭和51年のことであるが、海浜変形予測手法を開発するための研究計画をたててほしいとの要望があった。そこで、私はかねてからの持論である、「現象から学べ」と「真の共同研究」をこの際実行

してみたいと考えた。私の周辺の若手研究者の助けをえて、研究計画の構想を練った。さてそれを実行するとすると、色々の困難に直面した。

まず第一の問題は、種々の機関に所属する研究者が、果して心を一つにして「真の共同研究」に参画してくれるであろうかという危惧であった。特に運輸・建設など各省や電力中央研究所など民間の研究所に所属する研究者にそのような自由度が許されるかという心配であった。当初から覚悟していたが、これは容易ならざる困難な問題であった。幸いに良き協力者をえて、粘り強い折衝の結果、何とかやれる環境作りにこぎつけた。

「海岸環境工学」の発刊に至るまで



東京大学工学部長 堀川清司

第二の問題は、共同研究を現地観測を通して実現に向けて試行するための研究費をどうして得るかであった。そこで、私が研究代表者となり、トヨタ財団の昭和52年度研究助成に応募することにした。幸いに採択され、われわれにとっては多額の助成金をいただくことができた。このような研究計画に対して、文部省科学研究費を受けることは容易でないと判断していたので、私にとって千天の慈雨の思いであった。

かくてわれわれは勇躍、茨城県阿字が浦

海岸に赴き、昭和53年1月と7月の2回現地観測を行った。これに並行して、文献調査、理論的・実験的研究と多角的な活動を行った。それらの詳細は、昭和53年11月にトヨタ財団に報告した通りである。今から見れば研究初期の段階のもではあったが、これがその後の共同研究の端緒となったのは、紛れもない事実である。

○共同研究の進展

残念ながら、トヨタ財団からの継続助成は得られなかったが、先の実績を踏まえて、その後、電気事業連合会をはじめとする多くの機関の支援に支えられて、昭和57年度まで、毎年夏の終りに現地観測を繰返した。また前後80回に及ぶ海岸研究会の場で、相互に率直な意見の交換を行った。このようにして、ほぼ理想的な共同研究の場が形成された。昭和58年度はそれまでの研究の総まとめを、また昭和59年度は一貫性を持たせた本の執筆作業にあたった。このようにして出来たのが、「海岸環境工学」である。出版にあたっては東京大学出版会にお世話になり、また日本生命財団から出版助成金を受けた。

○エピローグ

われわれの共同研究と軌を一にして、アメリカ合衆国でもNSFの資金による5ヶ年計画のプロジェクトが進行した。両者は全く独自に構想され、最終目標は同じでも、研究計画は異なっていた。相互に情報交換を行ったが、われわれの方がより工学的な目標を明確にしていた。彼等の研究成果は本年中に本として出版されるというが、一部を査読した印象では報告書であり、その点われわれの方が一貫性があると思われる。しかし国際的な評価をうるには、今回出版された本を英文にして頒布する必要があり、われわれの仕事はまだ終わっていない。英文図書の出版のためには、助成を求めなければならぬ。これも今後の大きな課題である。



東南アジア便り No. 8

「ヴェトナムの東南アジア研究」

トヨタ財団国際部門 プログラム・
コンサルタント 岩本一恵

●初めてのヴェトナム

5月下旬に10日間ほどヴェトナムに行く機会があった。ヴェトナム社会科学委員会の招待によるもので、ヴェトナムと他の東南アジア諸国の人々、また、ヴェトナムと日本の人々との学術・文化交流がどのように可能かを検討することが目的であった。ハノイでは、ヴェトナム社会科学委員会の他に、東南アジア研究所、民俗学研究所、言語学研究所、世界経済研究所、経済研究所、考古学研究所、社会科学情報研究所、百科辞典編纂研究所、ハノイ大学、貿易大学、ヴェトナム社会科学ジャーナル編集局、外国語出版館を訪ね、多くの方々から社会科学、人文科学分野の研究状況について、また、交流への強い希望を聞かせていただいた。

今回の東南アジア便りでは、ヴェトナムにおける東南アジア研究の状況についてお知らせしたいと思う。丁度手元に、ヴェトナム社会科学委員会が出している「ヴェトナム社会科学」(季刊)の『東南アジア研究：目的、内容およびアプローチ』(1984年No.2)という記事がある。

街の食堂(ハノイ)



紙面の関係で全部を紹介することはできないが、かいつまんで要約してみたい。

この記事は、ヴェトナム社会科学委員会の傘下にある東南アジア研究所の設立10周年を記念して催されたシンポジウムで行われた発表をまとめたものである。

●東南アジア研究の目的

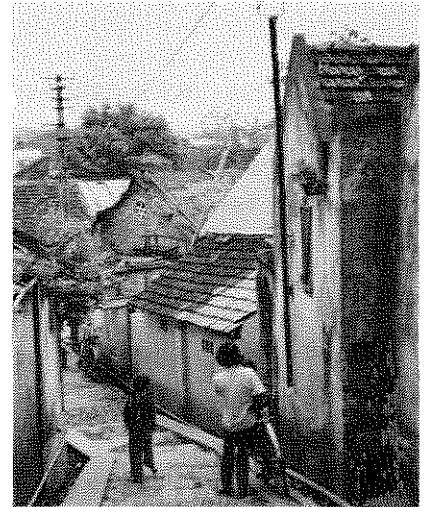
東南アジア研究の創始者であるグエン・カイン・トアン教授は、東南アジア研究所の基本的職務を次のように述べた。

- ①ラオスとカンブチアにまず焦点を当て、それから他の東南アジア諸国に拡大する。
- ②歴史、考古学、民俗学、言語学、文学、芸術から手をつけ、その後他の分野にも拡大する。
- ③東南アジア諸国の様々な側面について、また、東南アジア諸国との長い間の文化的関係についての科学的知識を促進させ、それを基礎にしてヴェトナム国家の起源、伝統、特徴についてよりよい知識を得て、国としての自尊心を養い、東南アジア諸国との連帯と友好を強化することに貢献する。
- ④東南アジアについての研究の分野で、国際協力を推進する。
- ⑤東南アジア諸国に関するヴェトナムの党と国家の外交路線のための科学的基礎をつくることに貢献する。

●東南アジア研究所の実績

ファム・ズック・ズオン教授(言語学)は、東南アジア研究所の過去10年の主な成果が1984年に次の10冊となって刊行されたこと、この他に多くの会議やシンポジウムが行われたことを発表した。①東南アジア古代史。②東南アジア近代史。③インドシナ3国の文化史。④東南アジア先史時代の考古学。⑤東南アジアにおける言語コンタクト。⑥東南アジア諸国の文学。⑦東南アジアの芸術。⑧平野の風景に親しもう。⑨20世紀前半のインドネシアの小説。⑩タイ語の単語構造。

国際協力の面では東南アジア研究所は、ソ連や他の社会主義国の科学アカデミー傘下の研究所や世界の多くの科学者と研究関係をつくる努力をした。特に、ラオ



湖岸の家並み(ハノイ)

ス及びカンブチアの学術組織や学者とは緊密な協力を行っている。協力分野は、インドシナ3国の文化史で、研究組織づくりとデータ収集に協力している。ヴェトナム社会科学委員会の協力相手は両国の文部省および文化省である。ラオスとは、ラオスの歴史、文学、地理に関する基本的研究の編纂を進行中である。カンブチアとは、「カンブチア人民共和国復興の5年間(1979~1984)」「カンブチア文化史」「ヴェトナム語-クメール語-フランス語の社会科学専門用語」の3冊を編集集中である。

●東南アジア研究の視点

カオ・スアン・ポ教授(歴史学者)は、東南アジアの文化を研究する際の歴史的文化的区分として、①ドンソン文化。②6~7世紀(ヴァン・スアン、ドヴァラヴァティ等の王国の興隆)③10~13世紀(ダイ・コ・ヴェト、マタラム等の独立王国の誕生。④13世紀(ダイ・ヴェト、スコタイ等の王国の確立)⑤16~19世紀(西洋資本主義による侵略の脅威)⑥20世紀(東南アジア各国の独立)をあげている。教授は、人間の社会には伝統と文化の改新の双方が必要で、双方が国家の特徴という核を形成すると考える。また、東南アジア研究の際、熱帯、高温、モンスーンという環境で人間がどう生きて発



帰宅途中の買物(ハノイ)

展していくかを研究することが重要である、と指摘している。

ザオ・テ・トゥアン教授(農耕学)は、東南アジアの文化の特徴である稲作文化を次の3つの主要タイプに分ける。①山岳地域の谷間(ベトナム北西部のタイ族居住地域など)の稲作で、権力の集中はない。②人口稠密な平野(紅河デルタなど)の稲作で、集権国家誕生の条件を備える。③人家が散在する広大なデルタ(メコン・デルタなど)の稲作で数世紀前から開拓され、封建所有制が急速に発達した。これら3つのタイプは、稲作文化の歴史の3つの段階でもあり、東南アジアの稲作文化に関連する生態システムの3つのタイプでもある。

ファン・ゴク教授(言語学)は、語形変化のない東南アジアの言語の研究には、近代言語学の成果の利用に加えて、単音節言語にアプローチする理論の構築が必要であることを協調した。約100種類にのぼるベトナムの方言調査の結果、動詞と形容詞(他言語から借用することが少ない)に着目して各言語の起源を研究することが有効であること、また、東南アジアでは2種類の言語を話す歴史的状况に置かれたことが多かったため、ある言語が下層となってその上に他の言語の影響が重ねられていること、を明らかにした。

日本には現在どのような財団があって、どのような活動を行っているのか、その全貌を知るのはなかなか難しい。

『日本の助成型財団要覧』

まとまる

一目で分るような資料がなかったからである。今回、ほぼこの要求に応え得るような文献が出版になった。(財)公益法人協会が当財団の助成によって編集・出版した『日本の助成型財団要覧』がそれ

である。この要覧は、助成・奨学・表彰を主な事業目的とする158の財団と109の公益信託をとりあげ、その事業内容について紹介している。

また、事業内容や基金規模、主務官庁等についての分析も行われている。(ご希望の方はTEL 03-455-2961公益法人協会へ。A-4 490頁、送料込みで2,500円。)

〈新刊紹介〉

「ヤンキー・暴走族・社会人——逸脱的ライフスタイルの自然史——」
(4-6版 280頁)
佐藤郁哉 新麗社 1,800円

本書は、前作「暴走族のエスノグラフィ——モードの反乱と文化の呪縛」の続編である(いずれも1983年度助成に基づく)。本書では、暴走族の「遊び」を成立させている諸条件を、「ギャング」と「ライフスタイル」およびそれらの「自然史」という角度から検討している。

ギャングの活動の多くは、コンプレックスや欲求不満という病理的な動機に根ざしているというよりは、青年たちが自らの手で意味深い経験と活動の世界を作りあげようとする、ある意味では極めて健康的な志向に基づいているとする。

そこで、大人たちは、青少年の文化・社会に展開する様々な形態の遊びがともすれば持ちがちな、暴力的かつ自己破壊的な傾向の行き過ぎをチェックしながらも、一方では、彼らの文化・社会のローカルティエーを尊重していく必要があると結んでいる。

「お産と出会う」
(4-6版 276頁)
吉村典子 幼草書房 2,200円

自らの出産体験を冷静にみつめる中から、現代のお産のあり方に強い疑問をいだいた著者は、瀬戸内海の四つの孤島を訪ね、明治生まれから戦後生まれに至る女性の

出産体験談を採取し、その変化を克明に記録した。本書はその調査に至るまでの著者の内面の描写と、調査結果の記録とから構成されている。

著者の視点は絶えず「生む側の主体性」という点に置かれる。そして医療技術の発達に伴う「安全性」とひきかえにこの「主体性」が失われていったことを指摘する。「お産」に関する「生む側」から見た文化史的研究としても貴重なものではなからうか。本書のもととなった研究は、1981、82年度の助成になる「出産に関わる女性の主体性の変遷に関する実証的研究」である。

「ロスアンジェルスのレストラン」
(A-5版 320頁)
石毛直道・小山修三・山口昌伴・栄久庵祥二 トムス出版 3,800円

1970年代の後半から、アメリカの西海岸では日本料理が急速に普及した。それまでは、日系人や日本からの駐在員、占領期に日本に来たことのあるアメリカ人など、限られた人が顧客であったが、この頃から一般のアメリカ人も日本食に強い関心を示し始めたのである。

本書は、この普及の震源地でもあるロスアンジェルスを対象に、日本食だけに限らず、それに伴って輸出されるさまざまな文化要素—店舗構えやインテリアや食器のデザイン、食事の食べ方やサービスの仕方など—の変容についての実証的な



文化人類学的研究の報告である。調査時点は今から5年前の1980年秋であり、現在ではさらに様相が変わっているかもしれないが、日本食という一つの文化がアメリカという社会でどのように受容され変容していったかがよく描き出されている。

第一部の「論考」に加え、第二部に「インタビューの記録」が収録されており文化変容の実態を生き生きと伝えている。

なお、助成時のテーマは「アメリカにおける日本食の変容—文化輸出の事例研究」である。

「海岸環境工学—海岸過程の理論・観測・予測方法」
(B-5版 584頁)
本間 仁 監修、堀川清司 編
東京大学出版会 13,000円

1977年度研究助成による「沿岸利用に伴う海洋環境の変化、特に海浜地形変化の予測手法の開発」と題する研究を基に、その後7年間にわたる研究の成果を集大成した大冊。「波と海浜流」「海浜地形と漂砂」「海浜地形変化の予測モデル」「海岸線変化の予測モデル」「現地観測」の5編よりなる。(詳しくはP5参照)

最近の報告書から

当財団の助成研究から、「成果発表助成」によって印刷された最近の報告書をご紹介します。入手ご希望の方は送料分の切手同封の上財団レポート係までお申し込み下さい。先着順となりますので、品切れの場合はご容赦下さい。

C-005近江八幡市における地域文化財を活用した個性的町づくりのための実践的研究 (西川幸治他, B-5 75頁 和文 送料 200円)

第1回研究コンクールで研究奨励賞を受賞した、市民・行政・研究者が一体となった「明日の近江八幡を考える会」による研究の成果。伝統的な地域における単調な新任区の環境を、そこにふさわしい

個性をもつ豊かな空間に整備していくための提案書でもある。調査編・活動編・提言編の3編からなり、町づくりの手法として「地域文化財の動態保存」方式を提言している。

III-032女性雑誌の日米墨比較研究

(井上輝子他, B-5 136頁 和文 送料 250円)

1970年代以後、女性の地位の向上、および女性文化の国際化現象の推進に大きく貢献しているものの一つに女性雑誌がある。本書は、アメリカ、メキシコ、日本の女性雑誌の分析・比較を試みた成果である。内容は①紙面構成の分析、②編集者へのインタビュー調査、③雑誌の登場人物の分析、④「COSMOPOLITAN」誌の三国比較などからなる。

IV-007下北半島出身者の職業的社会的化過程についての再追跡調査研究(II)

(細江達郎他, B-5 308頁 和文 送料 300円)

本研究の初年度研究の成果については、既に報告書が完成している。(85.5発行、報告書番号IV-002) 今回の(II)は、3年間の調査をもとに①研究者らの採用しているフィールド・リサーチの具体的な手法と、②ケース・レポートについて の原資料を提供することを目的にまとめられたものである。心理人類学の視点に立った社会調査の方法論のモデルを示すものとして参考になろう。(P4参照、なお、前回の報告書(I)は財団には在庫がないので、希望者は直接、岩手大学人文社会科学部細江研究室(0196-23-5171)まで連絡下さい)

III-229日本と韓国における漁村の生活文化の比較研究—鳥取県境港市、島根県美保関町の事例研究—

(益田庄三他, B-5 288頁 和文 送料 300円)

日本と韓国の漁村それぞれ3カ所をフィールドにして毎年1カ所ずつ、6年がかりの比較調査が、両国研究者の共同により進められている。その一部は当財団の助成によるが、今回の報告書は'84年夏に行われた第3次調査の成果に基づく両国研究者の論文集で、26章よりなる。

(なお、前回の韓国厚浦里における調査報告書も印刷されていますが、これについてのお問い合わせは直接、甲南大学文学部益田研究室(078-431-0391)までお願いいたします)

〈環境学研究フォーラムのご案内〉

第9回のフォーラムを公開で行います。ご関心おもちの方は環境情報科学センター(03-265-3916)村上までご連絡下さい。

テーマ：環境研究における疫学の有効性と限界

日時：1985年9月27日(金)

10:00~17:00

場所：東京都内(未定)

編集後記

◆毎年のことですが夏の一番暑い時期が研究助成の選考のピークにあたります。今年度も700件を超える申請をいただき、選考委員会では熱のこもった論議が展開されております。

◆一つの研究がある成果としてまとまるまでには長い月日がかかります。東大の堀川先生には8年前の助成に端を発したご研究の成果について、岩手大学の細江先生には20年前に始まった調査の追跡調査について、ご寄稿いただきました。

◆長期的な視野にたつて助成対象を選ぶということは、言うは易く、現実的には非常に難しいことを感じます。

トヨタ財団レポート No.33

このレポートを継続してご希望の方は、ハガキにて財団までお申し込み下さい。

発行日 1985年8月9日

発行所 財団法人 トヨタ財団

発行人 山口日出夫

編集人 久須美雅昭

印刷 真友工芸株式会社